

HPVワクチン問題は このままでよいのか

日本大学医学部産婦人科学系産婦人科学分野 川名 敬

KEY WORDS

- ヒトパピローマウイルス (HPV)
- 子宮頸癌
- 尖圭コンジローマ
- HPVワクチン

Issues of HPV vaccine crisis in Japan.

Kei Kawana (主任教授)

はじめに

生殖器に感染するヒトパピローマウイルス (human papillomavirus ; HPV) は、男女を問わず、性交経験のある人はほぼすべて感染している。HPV感染によって子宮頸癌、咽頭癌、肛門癌、陰茎癌、外陰癌、膣癌などが発生する。これらのHPV関連癌の多くは、HPV16/18型に起因する。これらのHPV感染は、HPVワクチンによって予防できることが海外で証明され、世界71カ国ではHPVワクチンが定期接種として導入されている。しかし、わが国ではマスメディアの報道によりHPVワクチン接種の勧奨中止となり5年が経過している。現在16歳の1学年は完全に無料接種を受けられない事態となってしまった。HPVワクチンの必要性和本来の定期接種の状態に戻すためにすべきことを考察する。

I. HPV関連癌

HPVには100種類以上のgenomic type (遺伝子型)が同定されている。子宮頸癌をはじめとする癌から検出されるHPVをハイリスク (high-risk) HPVと呼び、HPV16, 18, 31, 33, 35, 39, 45, 51, 52, 56, 58, 66, 68型が代表的なハイリスクHPVである¹⁾。尖圭コンジローマなどの良性乳頭腫から検出されるHPVをローリスク (low-risk) HPVと呼び、HPV6, 11, 42, 43, 44があげられる。ハイリスクHPV, ローリスクHPVの自然史, 疫学, 関連疾患は異なる。

HPV感染に起因する癌のなかで、最も関連性が深くかつ罹患者数が多いのは子宮頸癌である。わが国における子宮頸癌の現状をまとめた。国内では、年間約10,000人が子宮頸癌 (上皮内癌を含む)に罹患し、その3人に1人に相当する3,000人弱が死亡する。死亡に至らないまでも治療により妊孕能を失っている生殖年齢の女性が多く